

玄化堂甫尺墨蹟資料集稿

竹内 千代子 (聖トマス大学文学部准教授)

本稿は、玄化堂甫尺の墨蹟・絵画資料を収集したものである。甫尺の出身地である丹後には、多くの甫尺の墨蹟資料がある。その中、京都府舞鶴市郷土資料館蔵糸井文庫には、纏まった資料があり、立命館大学アート・リサーチセンター書籍閲覧システムによって全画像の閲覧が可能である。本稿ではこの資料の翻刻と解題を記す。なお、撰集等の版本や俳諧一枚摺は除いた。

凡例

- 一 各資料の表題は私に付した。
- 一 漢字表記は、原則として現行の通行体に改めた。ただし、原典の表記を尊重してそれに従わないものもある。
- 一 句読点、濁点は私に付した。濁点が原典にある場合は、(濁ママ)と傍記する。
- 一 漢字一字のおどり字は「々」に統一し、他は原典の通りとした。
- 一 改行は、私に行い特に示さない。必要なものについては、その旨を適宜記す。

- 一 糸井文庫の資料は、(糸井文庫請求記号/立命館大学ARC書籍閲覧システム番号)で示す。
- 一 解題にあたっては、『改訂版 丹後郷土資料目録』(舞鶴市教育委員会)の糸井仙之介氏の解題を参照した。

1 「今田巴明蔵墨跡帖」(十・ロ・10 / mai0b10)

古人のいへる事あり。不易は大空の日月の如く、流行は四時のうつりゆくがごとく、不易を心とし、流行の変をしるべしとぞ。不易に尻を居へれば、今日の変化におくる、流行にママわしれば、百年の実をうしなふ。ふママなきの中に流行あり、流行の中に不易あり。此さかへをしらむとて、巴丈のぬし、他の句をもとめ、世の不易流行、灯下の友にせんとなり。其冊子のはじめに筆をとるものは甫尺

寛政十一未中夏

五月雨や夕山こゆる鳥の影

さみだれや日半晴れば金魚売

【解題】升型本一冊。全五十丁、うち墨付十二丁。縦一八・七糎、

横一六・八糶。甫尺の序文と発句・鹿古・夕山・雨橋・升六・古光・玉洋・定雅・無外・鶏叟・多岬・十水・樗溪・其一のそれぞれが揮毫する。宮津住今田巴明旧蔵の「俳人墨跡帖」。

寛政十一年五月の執筆。行脚中に宮津に寄り、序文と句とを揮毫したもの。甫尺が芭蕉に傾倒する時期の執筆で、不易流行に言及しており、当代の「不易流行」の考え方の用例として興味深い記述である。なお、この頃、甫尺は芭蕉の肖像や、象潟の図を描き、奥の細道を通る行脚に出たものと推測されている（「郷土と美術」80号・沢村秀夫△蕪村と甫尺▽）。

2 「三月十一日付新兵衛宛甫尺書簡」(十・ロ・12 / mai10b12)

御芳書奉拝見「候」。春暖之節、御家内様御安静、奉賀候。御前様御不快、此節御心よく候よし、目出度存候。扱、私、早春より病さしおこり、存外之大病こまり入候。しかし、此頃追々全快「仕候」間、乍慮外、御安意可被下候。為御見舞宝封、尚寒ざらし之数々御恵不浅、御深切かたじけなく「奉存」候。快気後、得尊顔、御礼申上度、先は早々頓首

三月十一日

新兵衛様

甫尺

【解題】貼交巻物一卷(縦三一・〇糶、横二三三・六糶、全長四一二・六糶)のうちの書簡一通。縦一六・二糶、横五三・三糶。三月十一日付の新兵衛宛甫尺書簡。丹後地方にしばしば帰省していた寛政・享和期のもと推定される。早春よりの大病の状況を知らせ、金封・晒の礼を述べるもの。

宛先の「新兵衛」は、『丹後郷土資料目録』の解題に、「三上新兵衛」とする。三上家は町名主、宮津藩出入りの酒造業・廻船

業・糸問屋を営む豪商で、元結屋と号した。なお、三上家の文書は、京都府立丹後郷土資料館に寄託され、『元結屋三上家古文書目録』が作成されている。三上新兵衛は、享和元年十一月二十五日に没する六代目と、天保十二年六月六日に八十二歳で没する八代目とがあり、晩年の甫尺が丹後にしばしば帰省していた寛政・享和期と一致する。しかし、書簡中の「寒ざらし」からは、絹を扱う三上家ではなく、同家文書類の中には、後のものであるが弘化・嘉永・安政期に「木綿屋新兵衛」の名も見出され、「新兵衛」は別家とも考えられる。

3 「虎が雨」句文 (十・ロ・12 / mai10b12)

五月のすゑ、みちのく平泉にやどりしとき、奥浄瑠璃を語る盲目のむかしもおもひ出らる。ひとりは巧者に聞えて、ふしかくのいまめかしく、今ひとりはややくひなびたり。中／＼にあはれ深く、耳とゞまる処の多し。曾我物がたりを語るをりもこそあれ。雨の降れば

浄るりの下手ほどかなし虎が雨 甫尺書

〔玄〕(朱陰) 〔甫〕(朱陽)

【解題】貼交巻物一卷(縦三一・〇糶、横二三三・六糶、全長四一二・六糶)のうちの句文一紙。縦三八・八糶、横二〇・九糶。五月下旬、平泉に於いての執筆。芭蕉に傾倒し、奥の細道行脚中の寛政期頃と推定される。署名の特徴は、「甫」の七画目の点が無いもので、他に用例がある。

4 「蝸牛」自画讃 (十・ロ・12 / mai10b12)

かたつぶり人しれずこそ白のもと 甫尺 [化玄] (朱陰) [尺甫] (朱陽)

【解題】貼交巻物一卷(縦三一・〇糎、横二三三・六糎、全長四一二・六糎)のうちの画賛一紙。縦二九・一糎、横三三・五糎。署名は、「甫」の七画目の点が無いものである。

5 「時雨」自画讃 (十・ロ・12 / mai10b12)

手元より暮て軒端のしぐれかな 甫尺

【解題】貼交巻物一卷(縦三一・〇糎、横二三三・六糎、全長四一二・六糎)のうちの画賛一紙。縦二八・〇、横三二・二糎。署名は、「甫」の七画目の点が無いものである。火鉢にあたる二人の翁の画には、蕪村画の影響が認められ、寛政以後のものと同推測される。なお、同趣向の画賛は、他にも描かれている。

6 「冬籠り」句文 (十・ロ・12 / mai10b12)

蟬丸君の肖像にみづから讃をなして、逢坂の昔をしたふ筆の跡は、立圃翁にして、今はたむかしなつかしき物から、其句の言葉をかきて

琵琶の音を心に聞かん冬ごもり 甫尺

【解題】貼交巻物一卷(縦三一・〇糎、横二三三・六糎、全長四一二・六糎)のうちの句文一紙。縦二八・〇糎、横三七・四糎。

7 「春雨」色紙 (十・ロ・12 / mai10b12)

霞よりこぼれ初てやはるの雨 甫尺

【解題】貼交巻物一卷(縦三一・〇糎、横二三三・六糎、全長四一二・六糎)のうちの色紙一枚。縦一八・〇糎、横一七・〇糎、

銀散しの段雲霞。

8 「徒然草第二十一・四十四段図讃」 (十・ロ・13 / mai10b13)

万の事は、月見るにこそなぐさむものなれ。月ばかりおもしろき物はあらじ、といひしに、又ひとり、露こそあはれなれ、とあらそひしこそおかしけれ。をりにふれ、何かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流る、水の気しきこそ、時をもわかずめでたけれ。

つれぐ草四季の段のつゞきにあげつらふこと葉 甫尺書

あやしの竹のあみ戸の内より、いと若き男の、月影に色あひさだかなられど、つや、かなる狩衣に、こきさしぬき、いとゆへづきたるさまにて、さ、やかなる童ひとりぐして、はるかなる田の中の細道を稲葉の露にそぼちつ、わけ行ほど、笛のえならず吹すさびたる、あはれと聞しるべき人もあらじと思ふに、行かむ方しらまほしくて、見送りつ、ゆけば、笛をふきやみて、山の際に惣門のあるうちに入りぬ。榻に立たる車の見ゆるも、都よりは目とまる心地して、下人に問へば、しかぐの宮の御座処にて、御仏事などさむらふにや、といふ。御堂の方に法師どもまいたり。夜寒の風にさそはれ来る空だきもの、にほひも、身にしむ心地す。寝殿より廊にかよふ女房の追風よいなど、人目なき山里ともいはず、こ、ろづかひしたり。心のま、にしげれる秋の野等は、置あまる露にうづもれて、虫の音かごとがましく、遣水のをとのどやかなり。みやこの空よりは雲のゆき、もはやき、ちして、月の晴くもる事さだめ難し。

つれぐ草のことば 甫尺書 [化玄] (朱陰) [尺甫] (朱陽)

享和二戊とし初冬

【解題】 図讚一卷、(縦二六・〇糎、横二三七・三糎、全長二六三・八糎)。後人の筆による題簽に「玄化堂甫尺 徒然草図讚」とある。徒然草第二十一段には人物図を挿し、本文を書き記す。第四十四段は本文のみを書き記す。享和二年十月の執筆。署名は、「甫」の七画目の点が無いものである。

甫尺には、徒然草に関連した墨蹟が多く在る。なお、吉田九郎右衛門(兄)は、安永六年六月に、兼好法師追善の勧進の取次所を担当しており、安永六年六月付、御室双岡の長泉寺(兼好墓所)の一枚摺が存する(城陽市歴史民俗資料館蔵堀家マイク口文書・11-59)。

9 「三十六俳仙」自画讚 (十・ロ・14 / mai10b14)

あか〜と日はつれなくも秋の風 無署名(芭蕉)
 日の岡やこがれて暑き牛の舌 正秀
 青雲(あざら)のそこのしれざる暑さ哉 浪化
 いなづま(いなづま)やきのふはひがしけふ(あ)の西 其角
 君見(きみ)よや我手入(わがて)るぞ茎(くさ)の中 嵐雪
 牛呵(う)る声に鳴たつ夕(ゆふ)かな 支考
 応(お)〜といへどた、くや雪の門 去来
 ほと、ぎす啼(な)や湖水(うみ)のさ、濁 文章
 鳩(うら)の巢(う)や蛸(た)もかりの足やすめ 荊口
 世(よ)の中を這入(よ)かねてや蛇(へび)の穴 惟然
 麦喰(あ)し雁(かり)と思へど別(わか)かな 無署名(野水)
 市中は物の匂(にお)ひや夏の月 凡兆
 君が代(きみよ)や筑摩(きくま)まつりも鍋(なべ)ひとつ 越人
 がつくりとぬけ落(お)る齒(は)や秋の風 杉風

十団子も小粒になりぬあきの風 許六
 乞食(こじき)の事いふて寝る夜の雪 李由
 元日(ね)や昼(ひる)のうへの米俵 北枝
 子(こ)や泣(な)むその子の母も蚊(か)の喰(く)ん 嵐蘭
 人に似(に)てあさの風(かぜ)くむ猿(さる)も年越 珠頌(たま)

夜(よ)もすがらあき風聞(か)やうらの山 曾良
 梅(うめ)が香(か)や分入(わ)さとは牛の角 句空
 鉢(はち)た、き哀(あ)は顔(かほ)に似ぬ物か 乙州
 高燈籠(たか)は物(もの)うき柱(はしら)かな 千那
 さみだれのけふや泣川(な)大和川 桃隣

おもふ事たまつて居るかひきがへる 曲翠
 時鳥(とき)けふにかぎりて誰もなし 尚白
 霜(しも)の朝(あ)せんだんの実(み)のこぼれけり 杜国
 元日(ね)は晴(は)すましたる霞(か)哉 一笑

花散(は)て竹見(たけ)る軒(のき)のやすさ哉 洒堂
 小男(こ)鹿(か)の重(おも)り伏(ふ)る枯野(か)哉 土芳
 茸(しん)の白(しろ)きは露(つゆ)も見(み)へぬかな 荷兮
 唐崎(たか)の方(かた)へ目の行く時雨(とき)哉 涼菟
 おろ〜とむかへば月(つき)の後光(ご)かな 知月

咲花(さ)もむつかしげなる老木(らう)かな 木節
 軽(か)き身の蝶(た)は子(こ)もなし親(おや)もなし 猿雖
 来年(らい)は〜とて暮(く)にけり 露川

長松が親の名で来る御慶哉
三十六俳仙 平安玄甫尺拜書

野坡

【解題】三十六俳仙図一副、縦一三三・六糎、横五六・六糎。先行する三十六歌仙図に倣い、芭蕉門の三十六人と三十六句とを描いたもの。ただし、芭蕉像と芭蕉句を加えて三十七人と三十七句である。なお、酒堂と珎碩とは同一人物であるがそれぞれ人物画と句とがある。また、野水の句には署名がなく、人物画も句と離れた下の方にある句のない人物がそれに該当するものと思われる。芭蕉に傾倒する寛政後期・享和期の執筆。糸井氏の解題によれば、加賀金沢に於ける遺墨。

先行する三十六俳仙図には、義仲寺芭蕉堂内に掲げられた「芭蕉三十六俳仙図額」がある。これは安政三年に焼失するが、蝶夢の『施主名録発句集』（明和七年十月十二日奥）の三十六俳仙図と同様であったと推察されている。また、蕪村には安永頃を描いた三十六俳仙画帖（逸翁美術館蔵）がある。蝶夢の『施主名録発句集』と、蕪村の三十六俳仙画帖との異同は、句の一部の相違や用字のみの相違を除くと、同一作者・同一句は二十、同一作者・異句は十一、甫尺にのみある作者は支考・珎碩・句空・一笑・荷兮の五名である。その五名の変わりに蝶夢・蕪村図は、東花坊・苔蘇・如行・舎羅・素堂が入句している。

甫尺は蝶夢の三十六俳仙図を参照し、その他の多くは『奥の細道』『猿蓑』『炭俵』『阿羅野』などの当時流布していた芭蕉の俳書を参照しているものと推察される。

10 「象潟や」画讃 (十・ロ・15 / mai10b15)
象潟やひそかに雪を待気しき 甫尺

【解題】画賛一幅、縦九五・八糎、横二六・八糎。画に署名は無

く、画者は特定できない。「や」の二画目の「、」が無い書き癖がある。

11 甫尺画有道讃「後の月」画讃 (十・ロ・16 / mai10b16)

【解題】画賛一幅、縦一一九・五糎、横四〇・〇糎。甫尺画は、一人の僧と六人の旦那衆の趣で、「玄化」・「甫尺」の朱角印のみを押す。有道の讃は、「寄合てかたるもおしや後の月 有道」。

12 「染柳」自画讃 (十・ロ・17 / mai10b17)

起く心の心を染る柳哉 甫尺 [化玄] (朱陰) [尺補] (朱陽)

【解題】画賛一幅、縦一一三・五糎、横二九・〇糎。甫尺に植物の画材は少ない。署名の「尺」は二画目の「一」が無い。

13 「啼鹿」自画讃 (十・ロ・18 / mai10b18)

啼鹿の腮にかゝるや明の月 甫尺 [錦泉] (朱陽)

【解題】画讃一幅、縦一〇一・八糎、横二八・七糎。「錦泉」の落款の用例はこの一例のみ。甫尺に動物の画材は少ない。「や」の二画目の「、」が無い書き癖がある。署名の「尺」は二画目の「一」が無い。

14 「骸骨雅会図」 (十・ロ・19 / mai10b19)

【解題】絵図一枚、縦五五・五糎、横三〇・七糎。骸骨が参集して、碁・書・茶・活花・読書などをしてしている図。骸骨、碁棋書画の図柄は、当時好まれた文人画の一面材である。

15 「やすらい祭」自画讃 (十・ロ・20 / mai10b20)

洛陽 やすらひまつり

やすらひや花に見しらぬ顔もなし 甫尺

【解題】画賛横一幅、縦二七・五糎、横四二・三糎。奴ら数人の人物画には、蕪村の絵の影響が認められ、寛政期以後のものとして推測される。「や」の二画目の「、」が無い書き癖がある。署名の「尺」は二画目の「一」が無い。

16 「須磨浦月見」自画讚 (十・ロ・21 / mai0521)

海士が家の宵寝わりなし須磨の月
こりすまや松に寄添ふ月と我
すさまじや月に見られて穢まくら

甫尺自画 〔化玄〕(朱陰) 〔尺甫〕(朱陽)

【解題】画賛一幅、縦一一・五・九糎、横二六・四糎。木の下で笠を脱ぎ、横になる旅僧の図は、西鶴画の西行偃息図に似通う。署名の「甫」の七画目の点が無い。

17 「春雨や」短冊 (十三・16・12 / mai13 16-012)

春雨や夜明に似たる夕気色 甫尺

【解題】丹後与謝郡古俳人の短冊帖一冊のうち、段雲霞短冊一枚。糸井仙之介解題「玄化堂甫尺 伝記(一) 氏名未詳。宮津二生レ、母ハ岩屋村ノ人。京都ニテ剃髮シ、明和ノ末頃、無為庵樗良ノ門ニテ俳諧ヲ学ブ。安永六年、其兄、同門ノ俳人玄化ノ没后、自ラ玄化堂甫尺ト称セシガ如ク、別ニ清葉庵ノ号アリ。丹後宮津ニ遺セシ短冊」。

18 「夏の月」短冊 (十三・16・13 / mai13 16-013)

磔うつ川の瀬くらし夏の月 甫尺

【解題】丹後与謝郡古俳人の短冊帖一冊のうち、段雲霞短冊一枚。糸井仙之介解題「右(玄化堂甫尺) 同人 (二) 俳画ヲ能クス。

江戸ヨリ陸前塩釜ヲ歴テ、羽前・秋田・象潟辺ニ遊ビ、蕉翁奥之細道ノ跡ヲ辿リシ形跡アリ。富山・金沢辺ニ逗留シ、竹ノ坊ト共ニ能登ヘ旅シ、能登日記ノ編アリ。寛政ノ末頃ヨリ宮津ニ住シ。丹後宮津ニ遺セシ短冊」。

19 「蛩散や」短冊 (十三・16・14 / mai13 16-014)

蛩散や葎の宿の朧まくら (無署名)

【解題】丹後与謝郡古俳人の短冊帖一冊のうち、段雲霞短冊一枚。糸井仙之介解題「右(玄化堂甫尺) 同人 (三) 享和二年頃、宮津久美浜ニテ摺物ヲ催ス。文化元年四月十七日京都東山ニテ卒シ、双林寺ニ葬ル。享年ハ六十歳前后ナランカ。著書ハ天明四年ニ「樗良発句集」二冊、「無名集」二冊、「能登日記」一冊。丹後久美浜ニ遺セシ短冊」。

20 「夜の雨」短冊 (十三・16・15 / mai13 16-015)

夜の雨はれて門口の霞かな 甫尺

【解題】丹後与謝郡古俳人の短冊帖一冊のうち、雲上下短冊一枚。糸井仙之介解題「右(玄化堂甫尺) 同人 (四) 及び、享和三年ニ「松の朽葉」一冊。「な(奈)」の最終筆が上向きに止まる書き癖がある。

21 「初雁や」短冊 (十三・16・16 / mai13 16-016)

初雁や爰に落来る夜の声 甫尺

【解題】丹後与謝郡古俳人の短冊帖一冊のうち、段雲霞短冊一枚。糸井仙之介解題「右(玄化堂甫尺) 同人」。署名は、「甫」の七画目の点が無いものである。「や」の二画目の「、」が無い書き癖がある。

22 「藤三尺」短冊 (十三・16・17 / mai3 16-017)

暮春 春もはや藤三尺のながめ哉 甫尺

【解題】丹後与謝郡古俳人の短冊帖一冊のうち、段霞短冊一枚。糸井仙之介解題「右(玄化堂甫尺) 同人」。署名は、「甫」の七画目の点が無いものである。「や」の二画目の「丶」が無い、「な(奈)」の最終筆が次の字に繋がらず上向きに止まる等の特徴があり、明和・安永期の若い頃のものだと推測される。

23 「白雪や」短冊 (十三・16・18 / mai3 16-018)

白雪や遠山かけて軒の松 甫尺

【解題】丹後与謝郡古俳人の短冊帖一冊のうち、墨流し短冊一枚。糸井仙之介解題「右(玄化堂甫尺) 同人。京都二遺セシ短冊」。

〔付記〕

本研究は、舞鶴市教育委員会からの受託研究「舞鶴市郷土資料館蔵糸井文庫の展示とデジタルアーカイブに関する研究」ならびに、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業「デジタル時代のメディアと映像に関する総合的研究」のサブプロジェクト「テキストとイメージ」による研究成果である。

本稿を成すにあたっては、京都府舞鶴市教育委員会のご高配を得ました。記して深謝申し上げます。